

課題名：大腸がん患者を対象とした対話型生成AIの実用化に関する研究

Study of the practical application of interactive generative AI for colorectal cancer patients

代表機関／代表者：国保直営総合病院君津中央病院／須田竜一郎

分担機関：国立がん研究センター がん対策研究所

研究期間：令和7年7月～令和9年3月

研究開発目的

大腸がんと診断された後の「不安」「情報理解の難しさ」、そして術後回復に影響するリハビリ（プレハビリ）の実施率が低いという課題を解決します。

LINEで使える対話型AIが、専門家監修のもと「不安への寄り添い」「正確で分かりやすい情報提供」「プレハビリの伴走」を統合的にを行い、患者さんのQOL向上と医療者の負担軽減を実現します。

取り組み

- **身近なUIと専門家の知見**：新規アプリ不要のLINEで、精神腫瘍医・理学療法士・外科医が監修した、信頼性の高い支援を届けます。
- **共感的対話と根拠ある内容**：AIがやさしい対話で利用者の一次的な不安に寄り添い、監修済みコンテンツと参照情報に基づき、分かりやすく案内します。
- **プレハブ伴走支援**：短時間・低負荷の運動動画を提示し、無理なく主体的に治療準備に取り組めるよう、一人ひとりのペースに合わせて伴走します。
- **安全性の徹底**：診断・治療判断は行わない「情報支援ツール」と明確に位置づけ、実証研究で有効性や心理的安全性を慎重に評価します。
- **人間中心の設計思想**：本AIは医療者を代替するものではありません。治療方針などの重要な説明や人間的な対話は担当医が行い、AIはその理解を助け、いつでも内容を振り返れるよう補助する役割を担います。

期待される成果

- **患者さんのQOL向上**：AIとの対話を通じて治療への不安を和らげ、納得感を高めます。また、自宅で続けやすいリハビリ支援により、運動実施率の向上と合併症リスクの低減を目指します。
- **医療現場の質の向上**：反復的な説明をAIが補助することで、医療スタッフの負担を軽減します。これにより患者さん一人ひとりと向き合う、より人間的なケアの時間を創出します。
- **次年度への確かな基盤構築**：本研究の成果をもって、他施設での臨床評価や将来の社会実装（他がん種への展開）へ向けた事業基盤を確立します。

本システムのコンセプト



本システムのコンセプト

